Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2009年6月21日(日)

ティアラこうとう 小ホール

メシドール・アンサンブル演奏会

アルノルト・シェーンベルク
『浄夜』op.4 （弦楽六重奏版）
リヒャルト・デーメルのテキストに基づく音詩 *

―――― 休憩（10 分間）――――

ヨハネス・ブラームス
弦楽六重奏曲 第一番 変ロ長調 op.18 **

第一楽章 *Allegro ma non troppo*
第二楽章 *Andante, ma moderato*
第三楽章 *Scherzo. Allegro molto*
第四楽章 *Rondo, Poco Allegretto e grazioso*

ヴァイオリン：	勝部弓理子	(1st)
	室田亜希子	(2nd)
ヴィオラ：	竹島 愛弓	(1st)
	林　俊夫	(2nd)
チェロ：	室　裕文	(*1st **2nd)
	坂本謙太郎	(*2nd **1st)

2009 年 6 月 21 日(日)　14 時 00 分 開演
ティアラこうとう 小ホール

この演奏会に当って齋藤純一郎先生・大友肇先生にご指導を頂きました。
この場を借りて御礼申し上げます。

モーゼの役割はただユダヤ民族を契約の地に導くことであり、
モーゼ自身はその地に足を踏み入れることは許されない。
役割を果たした時、モーゼは死ななければならないのだ。
（シェーンベルクによる戯曲『聖書の道』より）

作曲家は割に合わない職業だ。先人と同じことをやっている限り認められることがないのに、目新しいことをすれば辛辣な批評の的になる。歴史に名を留める大作曲家も、その新作発表の場ではブーイングの嵐に見舞われることが珍しくなかった。ベートーヴェン(1770-1827)の英雄交響曲は長く、重厚すぎると批判され、バッハ(1685-1750)のマタイ受難曲の初演では「このオペラみたいな不遜な曲は何だ!」という悲鳴が上がったという。

しかし、革新的な新作も2度3度と演奏されるうちに、聴衆の耳に馴染んでいき、同時にその新しさが作曲者の個性として認められる。それが際立っていれば、後世に名が残ることになる。そうであれば、従来とは明らかに違う特徴がありながら、同時代の聴衆に受け入れられやすい新しさを作り出す技術は、作曲家の成功要件と言えるかもしれない。特に、作曲と自作の演奏活動以外に収入源のない作曲家にとっては、この技術が死活問題になりかねない。例えば、モーツァルト(1756-91)が貧困の中で早世したのはその典型だ。彼はある時から時代の先を行きすぎ、同時代人の理解が追いつかなくなってしまったのである。

さて、ブラームス(1833-97)とシェーンベルク(1874-1951)に目を転じると、この「受け入れられやすい新しさを作り出す技術」という点で二人は対照的な位置にあることがわかる。ブラームスはこの点では最も恵まれた作曲家の一人である一方、シェーンベルクはついぞこの技術には恵まれなかった。

新作初演にブーイングが付きものだった時代にあって、ブラームスの作品は初演から好意的に受け入れられることが多かった。これは、彼の音楽が正統なドイツ古典音楽の形式に則っていたからだろう。当時のドイツ音楽界には、音楽を絵画・文学など音楽外の観念を表現する手段と考える動きが広がっていた。リスト(1811-86)の交響詩やヴァーグナー(1813-83)の楽劇はその代表格だ。一方、シューマン(1810-56)やブラームスはこれをよしとせず、ハイドン(1732-1809)、ベートーヴェンによって確立された古典的な様式、和声、曲の形式を受け継ぎ、純音楽〜音楽が音楽だけで成り立つ世界〜を守ろうとしていた。ブラームスの音楽は、古典的な音楽に慣れ親しんだ同時代の聴衆に受け入れられやすい性質を持っていたのである。

しかし、伝統を守っているだけでは人気を博しながら時の波間に消えた数多の作曲家たちと同様にブラームスの名も忘れ去られたはずだ。ブラームスとて前述の成功要件は満たす必要があったし、現に極めて革新的な一

面を持っていた。
　例えば、歌心に溢れる旋律、旋律楽器としてのヴィオラの活用、弦楽六重奏というスタイルの確立など、初期の作品だけを見ても、ブラームスの個性は際立っている。また、ごく単純な動機とその逆行形・反行形を複雑に組み合わせて有機的な構造物のように楽曲を構成するブラームスに特徴的な手法は、後のシェーンベルクら新ウィーン楽派の十二音音楽の呼び水となる極めて斬新なものだった。
　このような保守と革新の絶妙なバランス感覚によって、ブラームスは同時代人に尊敬され、自作の出版だけで裕福な生活を実現した、歴史上数少ない作曲家となったのである。

　これと対照的な一生を送ったのがシェーンベルクであった。彼の生涯は絶えず無理解と敵意に満たされていたと言っても過言ではない。故郷ウィーンを三度も“追われ”、常に経済的困難の中にあり、70歳になっても篤志財団に助成金を申請しなければならない有様だった。極め付けには、この申請が却下されるという具合だった。それゆえ見世物小屋まがいの劇場の指揮者や小さな音楽学校の教職、作曲の個人教授など、生活のために意に沿わない仕事に忙殺され、創作に十分な時間を割くことができなかった。
　シェーンベルクは音楽に特段縁のない家に生まれ、幼少年期に専門的な音楽教育を受けた形跡もない。独学で過去の音楽技法を完璧に理解し、その遥か先に辿り着いたという意味で、彼は比肩する者のない天才である。
　しかし、彼は同時代人に受け入れられるという才能にはついぞ恵まれなかった。25歳で作曲した弦楽六重奏曲『浄夜』は、今でこそブラームスの高度な対位法と、ヴァーグナーの複雑な和声を受け継ぎ、発達させたロマン派音楽の集大成と認められているが、同時代人はその不協和音の世界に敵意を向けた。
　さらに彼の30代以降の無調の作品や十二音音楽に至っては、今も聴衆の理解が追いついていない。現代の専門家はこれらを音楽史上欠くことのできない業績と評するが、一般聴衆がそれを理解し、ブラームスの作品のように愛聴するには至っていない。
　その意味でシェーンベルクはあまりにも先に行き過ぎた。契約の地を示しつつも、そこに辿り着くことなく息絶えたモーゼは、まさしくシェーンベルク自身の姿に他ならない。彼の生涯を見ると、作曲家は割に合わない職業だと思わずにはいられない。

シェーンベルク
『浄夜』（弦楽六重奏版）op.4

　敬虔なキリスト教徒には受け入れ難いだろうが、イエスは婚外子だという説がある。ダーウィン(1809-82)の進化論以来の科学万能主義の立場では、マリアの処女懐胎は生物として起こりえず、ヨセフ以外の誰かが父親なのだと考えなければならない。他の男の子供を身籠っていることを承知で、ヨセフはマリアを妻とし、イエスを儲けた。成長して事実を知ったイエスは、

このような事情にも関わらず母を許し、自らを我が子同様に慈しんだヨセフを通じて愛を知り、それが後のキリスト教の教義の根幹となった・・・と、この説は続く。

プロイセンの詩人デーメル(1863-1920)の詩『浄夜』は、読む者にこの説を想起させる。この詩はしばしば死や妊婦など従来のタブーに踏み込んだ世紀末文学やスキャンダラスな私小説の類として捉えられる。しかし、それだけではあるまい。原語のテキストに verklären（浄める）、segnen（祝福する）など宗教的な意味合いを持つ言葉が散見されることからも、デーメルがこの詩にキリスト教の精神を込めたことは間違いないだろう。この男女はヨセフと受胎告知に戸惑うマリアなのである。

それでこそ、男の独白の最後の一文〜適切な翻訳に出会ったことがない〜も理解できる。原語で定冠詞を伴う“子ども”(das Kind)は神の御子イエスを指す。男は女を受け止めることでキリストの境地に達することができたと言っているのである。身籠ることが segnen（祝福する）というこの場にそぐわない言葉で表現されていることもこれで合点がいく。

シェーンベルクの『浄夜』は、この詩を音楽で表現したものだ。曲は一楽章形式だが、テキスト同様 5 節からなり、第 1、3、5 節で情景が、第 2、4 節にそれぞれ女と男の独白が描写される。のみならず、全てを失う覚悟で話し始めるまでの女の躊躇、衝撃的な事実を知らされた男の驚愕など、詩の行間も豊かに表現されている。

ブラームス

弦楽六重奏曲　第一番
変ロ長調 op.18

この曲はブラームス 27 歳の作品であり、室内楽曲としては最初期のものである。ソナタ形式の第一楽章、変奏曲の第二楽章にスケルツォとロンドが続く古典的な楽章構成、伝統的な和声と対位法など、ドイツ音楽の正統な後継者の面目躍如といえる作品だ。

一方で革新的な要素にも溢れている。弦楽六重奏という楽器編成は実質的にブラームスの創作と言ってよい。この編成によりヴィオラ・チェロを旋律線の担い手として自由に活用できるようになり、表現の幅は格段に広がった。これらの楽器、特にヴィオラの可能性を広げたという意味でも、この曲の果たした意味は大きい。

初演を引き受けたヴァイオリニストのヨアヒムは演奏会を控えた最初のリハーサルの後、ブラームス宛に以下のような手紙をしたためている。「各楽章とも素晴らしかったが、我々の演奏は良くなかった。特に終楽章が難しい。演奏会までに 2 回余計に練習することにした。」これを読むと、ブラームスが従来伴奏楽器として扱われていたヴィオラ・チェロの演奏技術向上や表現力拡大を促したという説が一層真実味を増してくる。

ちなみにその後の初演は、追加練習の甲斐あって成功裏に終わり、聴衆に温かく迎えられた。以来この曲はブラームスの代表的な室内楽曲として、また、代表的な弦楽六重奏曲として広く愛されている。

Verklärte Nacht

Richard Dehmel

Zwei Menschen gehn durch kahlen, kalten Hain;
der Mond läuft mit, sie schaun hinein.
Der Mond läuft über hohe Eichen;
kein Wölkchen trübt das Himmelslicht,
in das die schwarzen Zacken reichen.
Die Stimme eines Weibes spricht:

Ich trag ein Kind, und nit von Dir,
ich geh in Sünde neben dir.
Ich hab mich schwer an mir vergangen.
Ich glaubte nicht mehr an ein Glück
und hatte doch ein schwer Verlangen
nach Lebensinhalt, nach Mutterglück
und Pflicht; da hab ich mich erfrecht,
da ließ ich schaudernd mein Geschlecht
von einem fremden Mann umfangen,
und hab mich noch dafür gesegnet.
Nun hat das Leben sich gerächt:
nun bin ich Dir, o Dir begegnet.

Sie geht mit ungelenkem Schritt.
Sie schaut empor; der Mond läuft mit.
Ihr dunkler Blick ertrinkt in Licht.
Die Stimme eines Mannes spricht:

Das Kind, das du empfangen hast,
sei deiner Seele keine Last,
o sieh, wie klar das Weltall schimmert!
Es ist ein Glanz um alles her;
du treibst mit mir auf kaltem Meer,
doch eine eigne Wärme flimmert
von dir in mich, von mir in dich.
Die wird das fremde Kind verklären,
du wirst es mir, von mir gebären;
du hast den Glanz in mich gebracht,
du hast mich selbst zum Kind gemacht.

Er faßt sie um die starken Hüften.
Ihr Atem küßt sich in den Lüften.
Zwei Menschen gehn durch hohe, helle Nacht.

浄夜

リヒャルト・デーメル

人影が二つ、枯れた寒い森を歩んで行く。
後を追う月、二人はそれを見遣る。
月は高い樫の木の上にある。
雲一つない夜空に
木々が黒い棘のように突き出している。
女が言う。

子供ができたわ。でもあなたの子ではないの。
あなたの傍らで私は罪を背負っている。
私は取り返しのつかない過ちを犯してしまった。
幸せになれるとは思えない中で
それでもなお得たかった、
生き甲斐や、母親の喜びや
責任を。　そして大胆にも、
自分の性を委ねた、
それも行きずりの男の人に。
そして、私は“祝福”された。
でも、今人生の報いを受けた・・・
あなたに、ああ、あなたに出会ってしまった。

女の足取りは重い。
見上げると、月が後を追ってくる。
女の暗い眼差しは、月明かりに呑まれる。
男が言う。

授かった子どもを
君の心の重荷にしないでくれ。
ほら見てごらん、世界は輝いている！
この輝きが何もかも包み込む。
君は僕と冷たい海を漂っている。
でも、互いの温もりは揺らめき伝わる、
君から僕へ、僕から君へ。
この温もりがこの子を浄めるだろう。
どうか僕の子として産んでほしい。
君は僕の心に光をもたらした、
君は僕を“御子”にしてくれたのだ。

男は女の身重の腰を抱き寄せる。
二人の息が寒空に交錯する。
人影が二つ、澄みきった明るい夜を歩んでいく。

メシドール・アンサンブル

「メンバーを固定せず、演奏会のたびに‘いつかやりたいと思っていたあの曲’を携えた有志が集う緩やかなアンサンブル集団。メンバーは社会人、学生、主婦、職業音楽家まで幅広い。2002年以来8回の自主公演を開いているほか、音楽祭等にも参加している。

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当する。例年メシドールの頃に自主公演を開いている。

ウェブサイト：　http://messidor.hp.infoseek.co.jp/

これまでの演奏会

第一回（2002年7月13日　於：新宿文化センター 小ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第一番 ニ短調 Op.49（フルート版）

ブラームス：クラリネット五重奏曲 ロ短調 Op.115

第二回（2003 年 7 月 6 日　於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール）

ハイドン：弦楽四重奏曲 ニ短調「五度」Op.76-2

ビゼー／シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 へ長調「アメリカ」Op.96

第三回（2004 年 2 月 15 日　於：新宿文化センター 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第一番 ニ長調 K.285／オーボエ四重奏曲 へ長調 K.370／アダージョとロンド ハ短調 K.617／ピアノ四重奏曲 第一番 ト短調 K.478

第四回（2004 年 11 月 20 日　於：ティアラこうとう　小ホール）

メンデルスゾーン:弦楽四重奏曲 第一番 変ホ長調 Op.12

キュフナー(伝ウェーバー)：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調「鱒」Op.114

第五回（2005 年 7 月 10 日　於：ティアラこうとう　小ホール）

ヴォルフ:イタリアのセレナーデ ト長調

モーツァルト／ヴェント:フルート四重奏のための『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー:弦楽四重奏曲 第一番 ニ長調 Op.11

第六回（2006 年 4 月 30 日　於：ティアラこうとう　小ホール）

モーツァルト／ロットラー:木管五重奏曲 ハ短調

ベートーヴェン:七重奏曲 変ホ長調 Op.20

第七回（2007 年 5 月 13 日　於：ティアラこうとう　小ホール）

ベートーヴェン:アダージョとロンド（六重奏曲 変ホ長調 Op.81b より）

ボロディン:弦楽四重奏曲 第二番 ニ長調

モーツァルト:ディヴェルティメント 第十七番 ニ長調 K.334

第八回（2008 年 6 月 29 日　於：ティアラこうとう　小ホール）

バッハ:管弦楽組曲 第二番 ロ短調 BWV1067

シューベルト:八重奏曲 へ長調 D.803

今後の演奏会のご案内

2009 年 11 月 22 日（日）

於：ティアラこうとう（都営新宿線/半蔵門線 住吉駅）

チャイコフスキー：弦楽六重奏曲『フィレンツェの思い出』

プーランク：木管とピアノのための六重奏曲

全席自由　1000 円

この演奏会に先着 20 名様を無料ご招待いたします

messidor_ensemble@yahoo.co.uk　宛の電子メール　または

「〒102-0082 千代田区一番町郵便局留　坂本謙太郎」宛のはがきで

お名前・ご住所・電話番号・希望枚数をお知らせください